

【原著論文】 適応指導教室における学生ボランティアの研究

—ボランティア活動が与える学生への影響から—

馬 場 ひとみ

金城学院大学

Influence of Volunteer Activity on Students Volunteering in a Specially Designated Classroom

Hitomi Baba

Graduate School of Human Ecology, Kinjo Gakuin University

This study examined volunteers' motivations to continue working with children in a specially designated classroom. Student volunteers grouped with each volunteer unit were especially analyzed; this was intended to clarify the characteristics of each terms.

The student volunteers were divided into groups; the short-term group, the middle-term group, and the long-term group. We examined the groups and found that the difference among them was, based on the relationship between the students' desire to participate in volunteer work and their desire to work with children from the specially designated classroom.

The results of the study suggest that it is important to consider the student volunteers' mental health since their level of desire in volunteering will influence their commitment to volunteer work. If the student volunteers are highly committed then children from the specially designated classroom will benefit from their aid.

Keywords : Volunteer Students, (学生ボランティア), Specially Designated Classroom, (適応指導教室),
Volunteer Motivation (ボランティア活動継続動機)

要 約

本研究では、適応指導教室における学生ボランティアを対象として、ボランティアの活動継続動機や、通室生とのかかわりに関する調査を行なった。特に学生ボランティアを活動の継続期間ごとに群分けをして検討し、それぞれの期間ごとの特徴を明らかにすることを目的とした。

ボランティア学生を短期群、中期群、長期群に区分し上記について検討を行なった結果、それぞれの群に、活動意欲や通室生とのかかわりに特徴的な違いがみられた。このようなボランティア学生の特徴を把握して学生のメンタルヘルスのフォローを行っていくことが、通室生への質の良い支援につながっていくと考えられる。

キーワード：学生ボランティア (Volunteer Students), 適応指導教室 (Specially Designated-Classroom),
ボランティア活動継続動機 (Volunteer Motivation)

I. 問題と目的

不登校児童生徒の支援を行う場所の一つに、不登校児童生徒のための支援施設である「適応指導教室」がある。さまざまな問題背景を持った子どもたちが通う適応指導教室での支援は、通室生一人一人の抱えている問題やニーズに合わせた、多様できめ細やかな支援方法を必要としている。

文部科学省（2003）の「教育支援センター（適応指導教室）整備指針（試案）」の指導体制についての項目では、「指導員は、年齢、職種等、多様な人材の協力を得ることが望ましい」とされ、「相談・適応指導、学習指導等に必要な知識を有し、かつその職務を行うに必要な熱意と識見を有するものをあてる」としている。このように適応指導教室では、教員経験のある指導員や臨床心理士などに加え、大学生・大学院生がボランティアとして通室生の支援に当たっている。

古賀野（1999）は、適応指導教室でのかかわりにおいて、通室生と指導員の年齢差による世代間ギャップを解消することを課題としており、学生ボランティアは、この世代間ギャップを改善するために多く配置されている。大人または同年代の子どもたちとのかかわりが上手く持てない児童生徒にとって、学生ボランティアが子どもと同年代の友人の代わりとなり、同性同輩同士のような遊び相手、話し相手になれたりすることは、通室生にとって効果的にはたらくといえよう。

また春日井（2008）は、思春期・青年期の子どもの自己形成を支援するための大人の役割として、子どもとの「つながり役」（パートナー）と、子どもたちの「つなぎ役」（コーディネーター）であることを重要視している。「パートナー」として子どもたちと友達のようにのびのびと遊び、「コーディネーター」として同年代の子どもの橋渡し役となるように努めることが必要とされるのである。

ある適応指導教室でのサポートと、学生ボランティアのかかわりについて斜めの関係の観点から考察した豊嶋（2004）によると、通室生にとって、適応促進機能を持つのは「斜めの関係」とその中での共行動、承認、個の配慮・尊重と受容共感的な関係

性・対人態度であるとされている。

この斜めの関係については、笠原（1977）らによる研究などがみられる。笠原（1977）によると、この「斜めの関係」は、上下的タテ軸的、直系的な関係から離れた「中立的関係」とであるとされている。また、小森ら（1999）も同様のことを指摘している。「斜めの関係」となる人物は、教師・指導員や友人たちとは異なる存在であり、通室生と利害関係で結ばれることもないため通室生を脅かす存在にはならず、通室生が等身大でかかわることのできる存在であるといえよう。

これに関連して、ある適応指導教室の学生ボランティアを対象とし、通室生へのかかわり方や自己の変化について調査をした土井（2012）の研究では、ボランティアは通室生に対して教育的な立場からではなく、子どもと対等な立場でかかわろうとする姿勢をとっていた。ボランティア学生は、教師のように通室生の行動や成績を評価したりすることではなく、また同年代の子どもたちの中で起こり得るトラブルには関与しない中立的な立場であるため、この「斜めの関係」にボランティア学生がなり得ると考えられる。

一方ボランティア学生にとって、ボランティア経験はどのような影響をもたらすのだろうか。

原田ら（2011）によると、「大学にとってのボランティア活動は、キャリア教育やサービスラーニングといった、学生の学習効果や大学による、地域貢献の視点からも評価され、ボランティア活動への参加促進に力が注がれている」としている。

また、土井（2012）による研究では、適応指導教室のボランティア学生でも、これまで専門的に学んできたことが活動に活かされ、影響していることが示唆された。松本、杉山、隈元（2008）が「大学生にとって今やボランティア活動は身近なものになっており、自身の生活やその後の進路を豊かにするものと考えられている」と指摘していることから、学生にとってボランティア経験が有用であることが示唆されている。

そこで本研究では、適応指導教室における学生ボランティアに焦点をあてて調査を行い、その経験が学生にどのような影響を与えているのかを明らかに

した上で、通室生へのよりよい支援方法を検討する。

特に、ボランティア学生を活動の継続期間ごとに群分けして検討を行うことにより、それぞれの時期においての通室生へのかかわり方や、活動の継続動機等の特徴についても明らかにしていく。

II. 方法

1. 質問紙調査

(1) 調査対象者

Z市の適応指導教室で活動するボランティア学生。活動ペースは週1回を原則としている。サンプル数をより多く確保するために、ボランティアメンバーの入れ替わり時期をまたぎ、2回に渡り質問紙の配布・回収を行った。協力者数は49名であり、第1回調査時に配布・回収した20名と、第2回調査時に配布・回収した29名の回答を合算して検討を行った。

(2) 使用尺度

- ① 自尊感情尺度10項目 (Rosenberg, M, 1965 山本ら邦訳, 1982)
- ② ボランティア活動継続動機測定尺度16項目 (妹尾・高木, 2003)
- ③ 子どもへの関わり方尺度15項目 (伊藤, 2002)
- ④ 活動中の悩み尺度14項目 (伊藤, 2002)
- ⑤ 不登校イメージ尺度25項目 (笠井, 2000)

(3) 自由記述

活動の悩み・困り、活動に対する充足感

(4) フェイスシート

性別、学年、学部、活動期間等

2. インタビュー調査

第2回調査の際、インタビュー調査への協力意志を示した3名に、半構造化面接を行った。また、面接の前にはバウムテストを行った。

IV. 結果

本研究ではボランティア学生を短期群・中期群・長期群に区分し、それぞれの活動動機や子どもへのかかわり方の特徴、悩みに関して検討をした。

各尺度の合計得点平均を活動期間ごとに比較する

際、長期群を3か月以上とする場合と、3か月を含む12か月以上とする場合とで、区分を変更して比較を行った。3か月という期間には、区切りとして2点の意味合いがある。まず1点目は、新学期が始まってから、教室が長期休みに入るまでの期間を3か月と設定して区切りを入れたこと。そして2点目は、ボランティア学生の大半を占める“授業や実習として参加している学生”の授業・実習期間に着目したことである。授業・実習期間は、ほとんどの場合長期休みを区切りとした前・後期どちらかの半期間であることから、授業・実習の枠の中で活動をしている人が含まれる3か月以下と、その枠を超えて活動を行っている3か月以上に区分した。

一方12か月を区切りとした場合は、1年間活動を継続する中で、1年を通しての通室生の変化をある程度理解することができ、自身も適応指導教室という場に馴染むことができると考えた。そして、1年以上活動を継続している人を長期群として絞ることで、教室や通室生と特に深くかかわる層について検討することを目的とした。

1. 質問紙調査結果

(1) 各尺度・因子得点の活動期間による比較

① 長期群：3か月以上 短期群：3か月以下

自尊感情尺度の得点平均 (1因子10項目, $a = .86$), 活動中の悩み尺度の得点平均 (1因子3項目, $a = .69$), ボランティア活動継続動機測定尺度 (3因子) の得点平均と、その因子である自己志向的動機因子 (2項目, $a = .80$), 他者志向動機因子 (2項目, $a = .78$), 活動志向動機因子 (4項目, $a = .71$) の各因子の得点平均, 子どもへの関わり方尺度 (2因子) の得点平均と、その因子である働きかけ因子 (2項目, $a = .56$), 受容因子 (6項目, $a = .55$) の各因子得点の平均を活動期間ごとに比較するため、活動期間を3か月以上の長期群と3か月以下の短期群に分けた後に t 検定を行った。

協力者数は2回に渡る調査で得られたデータを合算し、長期群は29名、短期群は20名であった。なお、1回目の調査に回答した回答者が、長期群に2名含まれる。回答の重複を避けるためこの2名を除外し、長期群を27名として分析をすることとした。

その結果、ボランティア活動継続動機測定尺度の他者志向的動機因子に5%水準で有意差がみられ ($t(45)=-2.33, p<.05$)、長期群の人ほど他者志向的動機因子が高くなることが分かった。また、子どもへのかかわり方尺度の働きかけ因子にも10%水準で有意傾向がみられ ($t(45)=-1.74, p<.10$)、長期群の人ほど働きかけ因子の得点が高くなる傾向にあることが示された(表1)。

以上のことから、長期群の人ほど通室生への支援が活動の動機となっており、通室生に積極的にはたらきかけを行うようになる傾向が示唆された。

② 長期群：12か月以上 短期群：12か月以下

自尊感情尺度の得点平均(1因子10項目, $a=.86$)、活動中の悩み尺度の得点平均(1因子3項目, $a=.69$)、ボランティア活動継続動機測定尺度(3因子)の得点平均と、その因子である自己志向的動機因子(2項目, $a=.80$)、他者志向動機因子(2

項目, $a=.78$)、活動志向動機因子(4項目, $a=.71$)の各因子の得点平均、子どもへの関わり方尺度(2因子)の得点平均と、その因子である働きかけ因子(2項目, $a=.56$)、受容因子(6項目, $a=.55$)の各因子得点の平均を活動期間ごとに比較するため、活動期間を12か月以上の長期群と12か月以下の短期群に分けた後に t 検定を行った。

協力者数は2回に渡る調査で得られたデータを合算し、長期群は11名、短期群は38名であった。なお、1回目の調査に回答した回答者が、長期群に2名含まれる。回答の重複を避けるためこの2名を除外し、長期群を9名として分析をすることとした。

その結果、活動中の悩み尺度に5%水準で有意傾差がみられ、($t(45)=-2.11, p<.05$) 長期群の人ほど、ボランティア活動における悩みを抱えやすいことが示された(表2)。

表1. 活動期間ごとの各因子得点の平均と標準偏差

	長期群	短期群	t 値
自尊感情尺度	2.94 (.90)	2.99 (.59)	.24
ボランティア活動継続動機測定尺度	3.64 (.35)	3.58 (.39)	-.52
・自己志向的動機因子	3.72 (.48)	3.71 (.47)	-.06
・他者志向的動機因子	3.92 (.35)	3.67 (.38)	-2.33 *
・活動志向的動機因子	3.84 (.48)	3.85 (.66)	.03
子どもへの関わり方尺度	3.15 (.30)	3.04 (.24)	-1.33
・働きかけ因子	3.21 (.49)	3.01 (.30)	-1.74 †
・受容因子	3.36 (.30)	3.26 (.29)	-1.10
活動中の悩み尺度	2.16 (.38)	2.08 (.36)	-.74
※ () 内は標準偏差			* $p<.05$ † $p<.10$

表2. 活動期間ごとの各因子得点の平均と標準偏差

	長期群	短期群	t 値
自尊感情尺度	3.24 (.67)	2.89 (.80)	-1.23
ボランティア活動継続動機測定尺度	3.47 (.36)	3.65 (.36)	1.33
・自己志向的動機因子	3.60 (.44)	3.74 (.48)	.81
・他者志向的動機因子	3.79 (.38)	3.82 (.39)	.23
・活動志向的動機因子	3.69 (.59)	3.88 (.55)	.94
子どもへの関わり方尺度	3.21 (.32)	3.08 (.27)	-1.21
・働きかけ因子	3.25 (.45)	3.10 (.42)	-.96
・受容因子	3.46 (.23)	3.29 (.30)	-1.62
活動中の悩み尺度	2.35 (.29)	2.08 (.37)	-2.11 *
※ () 内は標準偏差			* $p<.05$

(2) 各尺度・因子得点の活動期間ごとの得点差の比較

自尊感情尺度の得点平均（1因子10項目， $\alpha=.86$ ），活動中の悩み尺度の得点平均（1因子3項目， $\alpha=.69$ ），ボランティア活動継続動機測定尺度（3因子）の得点平均と，その因子である自己志向的動機因子（2項目， $\alpha=.80$ ），他者志向動機因子（2項目， $\alpha=.78$ ），活動志向動機因子（4項目， $\alpha=.71$ ）の各因子の得点平均，子どもへの関わり方尺度（2因子）の得点平均と，その因子である働きかけ因子（2項目， $\alpha=.56$ ），受容因子（6項目， $\alpha=.55$ ）の各因子得点の平均について，より詳細に活動期間ごとの得点の差を比較するため，活動期間を長期群，中期群，短期群に分類後，Kruskal Wallisの h 検定と，Mann-Whitneyの u 検定を行った。長期群は9名（12～33か月），中期群は11名（5～8か月），短期群は27名（0.5～3か月）であった。

h 検定の結果，ボランティア活動継続動機測定尺度における，他者志向動機因子に10%水準で有意傾向がみられ（ $h(2) = 4.80, p < .10$ ），中期群の人は得点が高く，次いで短期群，長期群と得点が低くなる傾向が示された。

また，活動中の悩み尺度の得点平均にも10%水準で有意傾向がみられ（ $h(2) = 5.61, p < .10$ ），長期群の人は活動中の悩み尺度の得点が高く，次いで中期群，短期群と得点が低くなる傾向が示唆された（表3）。

また，Mann-Whitneyの u 検定を，短期群－中期群，中期群－長期群，短期群－中期群の3パターンの組み合わせで行った。

まず，短期群－中期群で検定を行ったところ，ボランティア活動継続動機測定尺度の他者志向的動機因子の得点平均に5%水準で有意差がみられ（ $u = 84.5, p < .05$ ），中期群の方が短期群より得点が高くなることが示された。また，子どもへの関わり方尺度の働きかけ因子の得点平均に10%水準で有意傾向がみられ（ $u = 94.5, p < .10$ ），中期群の方が短期群より得点が高くなることが示された。

次に中期群－長期群で検定を行ったところ，ボランティア活動継続動機測定尺度の得点平均に10%水準で有意傾向がみられ（ $u = 25.5, p < .10$ ），中期群の方が長期群より得点が高くなることが示された。また，同尺度の他者志向的動機因子の得点平均にも10%水準で有意傾向がみられ（ $u = 27.5, p < .10$ ），中期群の方が短期群より得点が高くなることが示された。

最後に，短期群－長期群で検定を行ったところ，子どもへの関わり方尺度の受容因子の得点平均に10%水準で有意傾向がみられ（ $u = 71.0, p < .10$ ），長期群の方が短期群より得点が高くなることが示された。また，活動中の悩み尺度の得点平均には，5%水準で有意差がみられ（ $u = 53.0, p < .05$ ），長期群の方が短期群より得点が高くなることが示された（表3）。

表3. 活動期間ごとの平均ランクとカイ2乗値（ h 検定）， u 値（Mann-Whitney検定）

	長期群 平均ランク	中期群 平均ランク	短期群 平均ランク	カイ 2乗値	u 値	
自尊感情尺度	28.61	25.64	21.80	1.88		
ボランティア活動継続動機測定尺度	17.39	30.41	23.59	4.54	中>長 (25.5)	†
・自己志向的動機因子	21.83	26.91	23.54	0.76		
・他者志向的動機因子	20.72	31.82	21.91	4.80	† 中>短 (84.5) 中>長 (27.5)	* †
・活動志向的動機因子	19.17	27.18	24.31	1.78		
子どもへの関わり方尺度	29.33	27.27	20.89	3.39		
・働きかけ因子	27.78	29.27	20.59	4.10	中>短 (94.5)	†
・受容因子	30.72	24.23	21.67	2.97	長>短 (71.0)	†
活動中の悩み尺度	33.50	23.32	21.11	5.61	† 長>短 (53.0)	*

※ () 内は標準偏差

* $p < .05$ † $p < .10$

Ⅵ. 考察

(1) 各尺度・因子得点の活動期間による比較

① 短期群：3か月以下 長期群：3か月以上

各尺度の合計得点平均を活動期間ごとに比較するため t 検定を行った結果、ボランティア活動継続動機測定尺度の他者志向的動機因子に有意差がみられ、長期群の人ほど他者志向的動機因子が高くなることが示された。また、子どもへのかかわり方尺度の働きかけ因子にも有意傾向がみられ、長期群の人ほど働きかけ因子の得点が高くなる傾向にあることが示された。以上から、活動期間が長い人ほど、自己の充足や社会貢献のためよりも、通室生への援助を軸としたボランティア活動をしていることが示唆された。その通室生への援助方法として、ボランティア学生は通室生の見本や良いモデルとなるように努めることや、通室生の良いところを評価したり、意欲や活動性を促したりするといったように、通室生に対して積極的に働きかけるかかわりをしやすい傾向にあることがいえる。通室生一人一人に合わせた積極的なかかわり方をするによって通室生の成長や変化があらわれることを期待し、それがボランティア活動を長期間にわたって継続していく動機となっているようである。

② 短期群：12か月以下 長期群：12か月以上

各尺度の合計得点平均を活動期間ごとに比較するため t 検定を行った結果、活動中の悩み尺度に有意差がみられ、長期群の人ほど、活動する上で悩みを抱えている傾向にあることが示された。

これについて考えられるのは、長く活動していく中で様々な経験や知識を得ていくうちに徐々に多角的な視点から考えることが出来るようになるため、『悩み』と感じる事柄の種類が増えていくことが考えられる。またその時々起こった事象や通室生の変化・動きをとらえられるようになることで、一つ一つの事柄をより深く考えるようになるのではないだろうか。

それでは、実際に感じられている活動上の悩みとはどのようなものであろうか。ボランティア学生への、半構造化面接によるインタビューで得られた回

答を挙げると、通室生とどのようにかかわるべきかといったことや、通室生との一対一のかかわりのみに留まらず、場の雰囲気づくりについての悩みが多く語られた。

また、学生自身の心の問題にかかわる悩みなども挙げられた。これについて、インタビューの中でも「子どもの態度が良くないものになると、自分が何かしてしまったのか気になる」といったような、通室生の情緒や状態の変化に揺さぶられ、学生自身が不安になってしまう体験が話された。

また、インタビューの中では「心理的な回復と適応指導のどちらに重点を置くか」ということも悩みとして話された。これは、教育的支援の面と心理的支援の面との両方を持ち合わせている適応指導教室だからこその悩みであろう。問題の中で述べたように、適応指導教室で働く指導員は、教員経験のある人や現役の教員である場合がほとんどである。そのような環境の中に、未だ心理の専門家でも教員でもない“ボランティア”の立場の学生が入って活動していく際、自分が目指していることと環境との相違を感じて、葛藤が生じてしまうことがあると考えられる。

しかし一方では、インタビューで人生におけるボランティアの意味を尋ねたところ、長期群の人から「自分の問題に気付くことができる」との回答があり、他者への関わり方だけでなく、自分の内面にも目を向けることができるようになっていた。活動を継続していく中で場に慣れ、様々な通室生との関係を築いていくうちに、他者理解を通じての自己理解も進んでいくことがいえるのではないだろうか。

以上の①・②で得られた結果から、3か月の導入期を超えると、自分自身の成長や充足のためよりも、通室生のために何かしたいという気持ちが生じるようになる傾向がみられた。その『通室生のために』という気持ちに伴い、通室生に対して積極的にはたらきかけていくようになるといえる。そのようにして積極的に通室生とかかわり、1年以上の経験を重ねていく中でボランティア学生に新たな視点が生まれるが故に、考えられる幅が広がり、悩みを抱えやすくなっていく様子が示された。

(2) 各尺度・因子得点の活動期間ごとの得点差の比較

各因子得点の平均、各尺度の合計得点平均について、より詳細に活動期間ごとの得点の差を比較するため、活動期間を長期群、中期群、短期群に分けた後にKruskal Wallisの h 検定を行った。その結果、ボランティア活動継続動機測定尺度の他者志向動機因子において、中期群の人は得点が高く、次いで短期群、長期群と得点が低くなる傾向が示された。

妹尾・高木(2003)によれば、他者志向的動機とは「他者援助を通じての社会貢献を志した動機」である。短期間の活動の中にある人が他者志向の動機づけが強いのは、活動を始めて間もない中で、『これから自分が通室生のためになることをしていきたい』という意志や意欲が強いからではないかと考えられる。しかし一方で、長期間活動をしていく中で動機づけが減少していくことについては、活動を長く続けているほど通室生への支援をすること自体に特別な意識を持つことなく、自分の役割として自然に継続していくことが出来ているからだと考えられる。

そこで、中期間活動を続けている人の他者志向的動機が、特に高くなるのはなぜであろうか。まず、本研究においての中期間とは、およそ半年以上ボランティア活動を続けていることを指している。半年以上活動を継続しているということは、授業の一環で活動していた人でも、およそ3か月間の授業期間が終了した後も継続して活動に参加しているということである。半年間活動を継続していると、徐々に通室生や教室に対して親和性が生じ、通室生や職員との関係が構築されていくことが考えられる。その中でボランティア学生に適応指導教室への帰属意識が生まれ、自分も組織の一員として通室生のためになることをしようと意識するようになるのではないだろうか。

一方、Mann-Whitneyの u 検定の結果からは、子どもへの関わり方尺度における2因子に、活動期間ごとの得点の差異がみられ、短期群の人は他の群と比較し、子どもへの関わり方に対する意識が薄い傾向にあることが示唆された。

短期群の人は他者志向が強い一方で、子どもへの

かかわりが薄い傾向があるという結果について考察すると、活動を始めたばかりの2、3か月程度では、通室生にどのようにかかわれば良いのかという具体的な方法がわからず、試行錯誤で活動をしている状態になっていることが考えられる。通室生への支援をしたいとの意志はあっても、数か月間の活動の中では通室生一人一人の特徴を捉えきることができなかつたり、自分のとるべき立場がわからなかつたりするという問題が生じる。このように自分自身の活動スタンスが掴めないままでは、通室生への具体的な支援に目を向けたり、支援方法を考えたりするような余裕を持つことができないことが考えられる。

一方で中期群の人が通室生への働きかけを積極的に行っているのは、ボランティア自身が適応指導教室という場へ慣れていくことや、活動の経験が蓄積されたことが関与していると考えられる。それにより徐々にボランティア自身に余裕が生まれ、支援者としての自分の役割や、通室生への支援を具体的にイメージしてかかわることが出来るようになるのではないだろうか。

かかわりについてさらに考察していくと、長期群の人ほど、通室生に対して受容的なかかわりを行っていることが示された。長期間の活動を通して臨床経験の蓄積がなされることで、支援者側が働きかけていくばかりでなく、通室生のペースに合わせた支援に変化していると考えられる。

また、活動中の悩み尺度については、Kruskal Wallisの h 検定とMann-Whitneyの u 検定の両検定において、長期群の人ほど悩みを抱えやすく、短期群の人ほど悩みを抱えることが少なくなることが示された。この結果は、上述の(1)活動期間ごとの各因子得点の平均と標準偏差の中で既述した、長期群の人たちの悩みの抱えやすさについての考察をより強めることになるであろう。活動を長期間継続するにつれて、悩みが増加していく傾向にあるということは、1年以上の経験を積み重ねていく中で、活動の中で起こる事象を多角的にとらえる視点や、教室や通室生に対してのボランティア学生の考え・思いが、徐々に深まっていく様子をあらわしているといえるのである。

VI. 総合考察

本研究ではボランティア学生を短期群・中期群・長期群に区分し、それぞれの活動動機や子どもへのかかわり方の特徴、悩みに関して検討してきた。各期間群に関して総合的な考察を行い、これらについてさらに深めていく。

1. 短期群

t 検定や h 検定、 u 検定で示された、他者志向的動機の弱さや、子どもへの関わりに対する意識の薄さから、短期群の人は、ボランティア活動自体には意欲的であるものの、通室生への具体的な支援をどのように行えば良いのか、掴めないまま活動をしているようだった。短期群における悩みに関する自由記述の中では、「通室生に対して近寄りすぎてしまう・遠巻きに見すぎてしまう」といった距離感の問題や、「声掛けの仕方をどのようにすれば良いかわからない」といった、通室生とのコミュニケーションにおける基本的な部分についての悩みが多く書かれていた。その一方で、インタビューの中で活動で感じた嬉しさ・充実感を尋ねたところ、「通室生に話しかけられたり、遊びに誘われたりすること」が回答として挙げられた。このように、悩みながらも試行錯誤している中で、学生の言動に対する通室生の応答や、通室生からの声掛けなどは、学生への報酬として成り立つ。そのような報酬を手に入れる中で活動に手ごたえを感じ、継続していくことが出来ていると考えられる。

しかし、中には自分の行っている支援に自信を持たず、通室生との関係を上手く築くことが出来ないと感じている学生も当然いる。自分の支援に手ごたえが感じられなかったり、通室生とのかかわりが上手くいかなかったりという体験は、学生にとっての失敗体験・傷つき体験になりうる。そのような場合、通室生への支援をすること以外にも、学生へのフォローアップが必要不可欠になっていくといえる。

2. 中期群

h 検定や u 検定で示された他者志向的動機の強さ

と、子どもへの働きかけに対する意識の強さから、中期群の人は、通室生へのより具体的な支援を意識した活動を行っていることが分かった。導入期を超えた活動を行っていく中で、徐々に活動に対する要領が掴めるようになり、自分が行うべき支援を具体的にイメージできるようになることが、通室生へのより具体的な働きかけに繋がっていると考えられる。

また u 検定では、活動継続動機測定尺度の得点が他の群と比較して高くなることが示された。導入期を超えて活動を継続させていること自体が活動に対する意欲のあらわれでもあるが、その理由として、通室生や職員との関係性が構築されることにより、教室への親和性が高まるといったことが考えられる。教室への帰属意識が芽生えることや、自分がこの場で役に立つことが出来ている、と手応えを感じられることが、活動を継続できる動機となりうるのではないだろうか。

それに関連して、この時期を境として、ボランティアを継続できずに辞めてしまう人たちも多くいるという事実がある。授業や就職活動といった、やむを得ない事情で継続が不可能になった場合もあれば、何らかの理由から教室や通室生に対して馴染むことができずに、様々なストレスや葛藤を抱えて辞めていったケースも当然であろう。短期群の人たちの傷つき体験に関して既述したことと同様に、そのような学生たちの存在に対しても目を向けていく必要がある。

3. 長期群

長期群については、 t 検定の結果から、通室生への受容の態度に対する意識の強さが示された。長期間の活動を通じた臨床経験の蓄積がなされたことにより、通室生のあるがままを受容し、通室生自身の成長を待つといったような、通室生のペースに合わせた支援を行うことができるようになることが分かった。

一方で、 h 検定、 u 検定の結果からは、活動への動機づけの中でも、他者志向的動機が特に弱いことが示された。これにより、「通室生のために自分が何かをしよう」というような、積極的な支援に対す

る特別な意識を持っていないことが分かった。長期間続けることによる慣れなどにより、活動が当たり前のものになっていると考えられるが、このような“慣れ”は、ポジティブにもネガティブにも作用する。ポジティブに作用すれば、活動に慣れることによって自分自身が自然体で通室生とかかわることができ、それによりボランティア学生としての“ななめの関係”を構築できるといったこともあるだろう。しかし、これがネガティブに作用した場合、まるで友だちのように通室生との距離が近すぎてしまうことや、支援の方法がパターン化してしまい、一人一人に合わせた支援がしづらくなることも予想される。活動がルーティンワークとなってしまうことのないよう、活動の報告を頻繁に行うことや、時には事例検討会を設けて、ふりかえりの機会をつくることも必要となるのではないだろうか。

このような活動への慣れが考えられる反面、長期群の人たちは、特に悩みを抱えてしまう傾向もみられた。調査の中で悩みを問うと、活動をしている上ではどのボランティア学生も少なからず悩みを抱えているが、教室や通室生との関係の深さや立場によって、悩みの質が変わるようであった。長期群の人へのインタビューで「自分の問題に気付くことができる」との回答があったように、活動を継続していく中で、さまざまな通室生との関係を築いていく内に、他者理解を通じての自己理解も進んでいくのではないか。それは、短期群の人たちが期待するような、自分自身の成長や充足の達成をあらわし、適応指導教室での活動を継続させる中で、大きなメリットとなりうる。

4. まとめ

以上のように、本研究では、ボランティア学生を短期・中期・長期の3群に分けて検討を行ってきた。短期群の人たちは、活動自体には意欲的であるが、一方で自分がどのように動けば良いのか分からない。中期群の人たちは、通室生への支援を行うことへの意欲が特に強いが、一方で活動を辞めていく人も多い。長期群の人たちは、自分の動きを意識して、通室生への働きかけを行うことができるが、一方で活動への悩みを抱えてしまいやすい。このよう

なそれぞれの層の特徴を掴んでおくことが、学生へのフォローの一助となるのではないだろうか。それは、ボランティア学生同士で悩みを共有することであったり、職員と通室生の情報を共有することであったり、専門家のスーパービジョンを受けることであったりと、様々な方法が考えられるが、学生が一人で抱えてしまうことなく、教室にかかわっている誰かと自分の体験を共有することが要となる。活動中に十分な話し合いの時間が持てないのであれば、困ったことがあれば職員に自ら相談できるような、すぐにSOSを出せる環境づくりも必要となるだろう。

通室生への支援をしていく一方で、ボランティア学生のフォローアップを行い、学生のメンタルヘルスを保っていくことは、ひいては通室生への質の良い援助に繋がっていくであろう。

5. 今後の展望

本研究では、活動中のボランティア学生を対象として、活動継続動機や通室生へのかかわり方に関する調査を行なった。今後の展望として、2つの角度からの視点を加えていきたい。

1つ目の視点として、活動の期間のみに着目するのではなく、活動に参加した回数にも着目したい。それにより、ボランティア学生の活動に対する考え方・感じ方や、集団へのかかわり方を、より理解することができるであろう。

2つ目の視点として、既にボランティアを辞めてしまった人たちに着目したい。質問紙・インタビュー調査を行い、ボランティア経験が当時の自分にどのような影響を与えていたのか、そしてボランティア学生自身に対してどのような支援が必要だったのかということを問うことで、活動から得られるメリットや、活動に際しての注意点を浮き彫りにすることができると考えられる。さらに、現ボランティア学生・元ボランティア学生に、教室への帰属意識やかつての居場所感に関する調査を行うことも、この研究をより深めることに繋がっていくであろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、熱心なご指導・激励を頂きました、川瀬正裕教授、仁里文美教授に、深く感謝いたします。

そして快く調査を受け入れてくださいましたZ市の適応指導教室の皆様、貴重な時間を割いてアンケート調査にご協力いただきました職員の皆様・ボランティア学生の皆様に、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 土井智文 (2012). 適応指導教室における不登校支援ボランティアがボランティア自身に与える影響 岐阜大学2012年度卒業論文 (未刊行)
- 原田直樹 梶原由紀子 吉川未桜 樋口善之 江上千代美 四戸智明 杉野浩幸 松浦賢長 (2011). 大学生ボランティアによる学校児童生徒への支援ニーズに関する研究 福岡県立大学看護学研究紀要 8, 1-9.
- 笠原嘉 (1977). 青年期—精神病理学から— 中央公論社 (中公新書)
- 笠井孝久 (2000). 不登校児との共同体験による不登校イメージの変化 千葉大学教育学部研究紀要I 教育科学編

48, 221-229.

- 春日井敏之 (2008). 思春期のゆらぎと不登校支援—子ども・親・教師のつながり方— ミネルヴァ書房 20-25.
- 古賀野卓 (1999). 適応指導教室が学校に問いかけるもの—津山市教育相談センター鶴山塾を事例として— 美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要44, 18-33.
- 小森聖子 豊嶋秋彦 (1999). 不登校の学校要因と人格要因 (2) —不登校生徒における動機づけ要因と衛生要因— 東北心理学研究 49.
- 松本剛 杉山愛奈 隈元みちる (2008). 不登校支援における学生ボランティアの意識調査—NANAつくす活動をととして— 兵庫教育大学研究紀要 33, 63-71.
- 文部科学省 (2003). 教育支援センター (適応指導教室) 整備指針 (試案)
- Rorsenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. Princeton University Press
- 豊嶋秋彦 (2004). 教員養成学の構造からみた不登校生のサポートと「斜めの関係」
- 対人専門職への社会化研究の実践的理論的意味— 弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号 27-42.
- 山本真理子 松井豊 山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64-68.